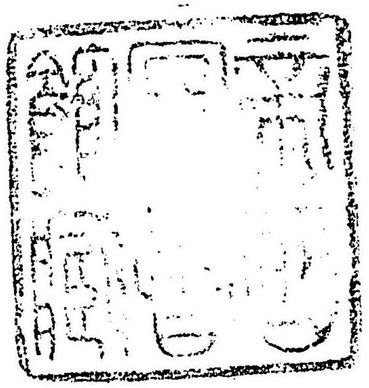
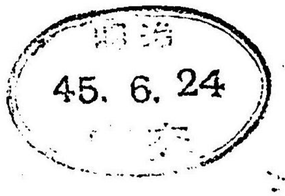
特42
13
445

志賀
鶯
大賀御章
梅枝
摹彩古

七

255
532




45. 6. 24

三月 脇後

志賀

四月 四五番目略三番目

鷺

前シテ 老翁 ツレ 男
後シテ 大伴黒主 ワキ 大臣

四月 三番目

大原御幸

前シテ 舟人 ワキ 僧
後シテ 鷺

九月 四番目略三番目

梅枝

前シテ 女院 ツレ 法皇 阿波内侍
後シテ 富士ノ妻 ワキ 大納言局 五辻殿 ワキツレ 僧

三月 三番目

整形古

前シテ 女 ワキ 僧
後シテ 和泉式部 ツレ 大臣 家 ワキツレ 従 僧

志賀

四段上三人

道あるゆゑ代の花園の都

山うち長閑さ 桜見の當今よる住

なる所下也備も江州志賀代山櫻

ぱらと感成由緒よりの志賀

代山路つゝ急いと春乃色あひく

雲乃朝ぼらけ遠の音

羽山きさ都やれば見へそこの名よあり
志賀ヶ山ごえや湖遠き。諏の郡
名ハ程ふ江州志賀ヶ山よ長くハ
皆洗ふよりそ苔を除うぎるまそハ
ち浪や志ゞヶ都の名をとめて昔
ゆゝらの山桜　吉よあれくや心
なさ分ふ情の強る賢　山路よ

日暮ぬ拙子牧笛ヶ聲、人間萬ゞ
様ぐの世をわくりゆくうの有様把
ごとよさへぎる眼ヶ常ぎりヶ歌やや
送るらん餘りよ山と吉く分て
又師と立つぐるくハつるすも良
岩ゝ谷の門おと雨しのゝ消えて
松の風ヶ家やあやまるく半

日の宮を出て、今日の道のほど、
行くすゑ遠く、
をれば重うるべき薪より、
折りて休む所の陰あり。見れば
心ありて休むべし。薪の折れたるや
来たるか。伝聞くに、先薪より
初めの道のべ出でより、
折りて人に薪や重きと問へば、
人もなし。不審有りて、今更行くと答
へ、中きんの奥深き山路あれば、松を
指して多きれば、なほ行く
ものと。薪の陰より休
伝の面白きまま、
主の事なれば、其様賜はりぬ。

の薪をおひて花の陰に休む姿の
寔も又其方は意ぎぬ振舞所し
謂へや上臈もこれ　ワキ　古のことに増るを
もうらやまざれおどる賤も賤しき其ぞ
とかな古人のおもきを花城なりきそと
やはらくも古歌のたとへの心をそへつる
ぞ今にみな答すなり　上カル　シテ　いやく古歌乃

たとへとや境も更く表る所あれば
に至りきみるも思ほりて　ワキカル　彼大伴
は黒主が心をよする老の浪　シテ　和歌の
うらわかきほど葉より　ワキ　かくまさとへおく世
語のそれは黒主　ワキ　是の城よ　シテ　本歌
も賤しき　ワキ　山がつの　合　上カル　かまの廰ぎぬ
かあきらめさせたまへ都人中の思

出る苔の陰に休まんとやて過ぬ筆
を洗て貫之がこゝ城の山のおのゝ
ゝらに古へ今の道とうやくそれ
かこうつ時代と尋ぬるに近き世
代に国を惠み民をあで萬機の
まつりかを治めゝ給ふ
時に至りてやうやく道さうむ

今代孫子を擢ひ二世三世に伝へを始と
して代々乃人々世の為べの為乃ひ
ひろおり林に生げる木の枝乃露の
色にそまりて多人の心を花に成とも
家埋木に人に知ぬこと わざ迄に情とうや
松雅波津清水書山の陰に山の
井に あきくの行る世の家ゆき

家来る色あれや濱流さ流より数多
きその城の心乃色れ公書迄も姫成
や敷鴻の道有時代のまてあうび
給れい三十一文字の外を守護の旨
て無見頂相の如来も感應ふ給へ
べ君を安まる萬民時を楽まて
円満乃雲の去る西海八鴻の外迄も

浪の吉萬歳の響乃どをうきを
入うきへらぎ乃ちゃひさま歳れまつり
ごとは道直ま渡る日の東南ま雲清り
西北ま風静まる城まを中きうゆく
や花を常盤の山松乃ちまのようふ
吉迄を見和子の旅まもゆべ天
地を動の鬼神を感をあひくうや

上ロンギ地
家やさゝれる山賤の　家路いづくの
末なるらん床しき心あらばこそ　今も行
をさつむべきは其古への大伴の黒主と
いはれし時代にて此山の神となる人や
あるらん　上地　そも此山の神ぞとのみつぎ
や樵の大伴は　それの黒主が家の名残
大伴の　我の出でゝ　薪をおひても　なく
て独り山路の花の陰に休らひつる
をつゞけし夕の雲に立ちかくれて志賀
の花や散り積りぬる　いだきまで
まづ山笥にまじはるは　嵐は
あきの花の陰に休らひてあふの原
時の調子はうつり行　歌の拍子
あらたなれく　出端　雲あらぬいく

きびの神やとちらまつ花のうぐきの
志賀の山越えて来し同じ花ぞその里も
春めくを浦の海の志賀辛崎の松
風返さぬ静の春のけさの海
ごとにかすみてぞ山の年波
ぬる方も老ぬるうらみそれ君が見ぬ
志賀の花ぞ山の神の松ぞ
神楽の夕ぞ

地 花さこそ咲れ白和幣 中 松の立枝の
地 青和幣かくまやる夏あげさゆみ 中
春乃山邊をまくれば道もちりあ
つぶちる花の雲の袖とをつ
くれ幕乃浦袴のうべもかり柏子
をそうへて神かぐらぎよ面白き
かぐらぎよ面白き

鵜

世界捨人は捨の家もおもかる
いづくか住ん 月の諸国一見乃
僧みるは我洗足の三熊野よ集り
て仏の見より都よりぼらばやと
思ふ 和泉 帰国紀ノ路の関
都 行末和泉あるは篠田

乃森をうちるとて。松風ふく里を
は。家倉の江や。難波がた。芦やの里よ
芦はきりく。名は狂よ。見やうちや
津乃國芦やの里よ。ふるくは。日乃
暮てゝ程よ。宿をからざやとゝ
悲きうれやゝ。難波。心と。
ど盲龜の浮木。たゞ。闇中よ。堀求
ぢらべは。もしそもて。亡心何よ
強る。境。うき。流。浪のうつ
ほ。毎。こゞれてたゝぬ。へを
悲ひ。ぶ。ひまゞ。あき。ふ。ま
や。お。も。更。ゞ。ろ。乃。う。見。あ。ま。樂。よ
ゝ。ひ。る。そ。の。ち。を。み。き。び。き。て。し。よ。加。ゝ
ら。ゞ。し。て。毎。乃。ち。ゝ。ら。ゝ。あ。ら。ゝ。ば。

埋木のごとくなる老人の影もはづかし
あらぬ所にまぎるゝ者やなかなかにまぎ
は者と兼ぬるぞそあるひは如何成人やらん
元よりうきを世に埋木の如くすまぬ
身とおぼしめさぬ不審をなし給ひ
うとよいや是は此里人のぞも
ふつぎある舟人の夜ゝまかれといひ

つるまでこればたゞはまべ我もな
世をわたす業なり此里人とあるのや
のあまの塩焼あま人の類を行と
疑給ふ塩やくあまのたぐひならば
わざとばあるいへありきする夜ごと
鵜するはふしんなり実ゝいはるゝ有
ろうちと疑給ふも謂あり古き亭ろも

芦乃やの あぐ流塩やきに成あく
つぎ乃をぐ〜きちり〜ぐ来すきり
我そうきよ四に成あれ 吉ほよ
ちれて 舟人世と ちでき来り
うつほ舟く 現ら夢かあきて社
ぷるめも ぷらぬ芦のやよと炭祝く
海士人世心の間とひ孫〜ぐ雑や橈

人世と通き居るちあり我ぷの
みそすて小船法せ力と頼ちありく
仔と刀平をだ更よ人間と哭ぐ祭
ぷれる者ぐ名をと名来へて来の
迎衛院法宇よ。頼改ぐ矣き紀よか
里。命を失ひ 鞠とやしきの亡忘
きくぷを舟の方損妻語つく内を

ナレバ、ベし、法ヲトウて給リケレ、叔父
鶏の毛ヲ、ムシリ、ケレ。其時の方様、安く
かくりケレ。跡ヲとゞ、懇ヨトラヒハベし
クリ上ル
拙モ、ヲ、法院乃法、壮伝の時。仁年ハ
ツヨク
こゝ、ほひ。主人ノ、ヨ、ク、法、悩あり。
上ニナル
有弾ハ、高僧貴僧ヨ、伝て。大法ヲ修
きられき、ハ、ゞも。其ヲ、ル、更ヨ、あり、

き、ヲ、法、悩ノ、ウ、の剣ゞりヲて、あり
ケるか。東三條ハ、森のまより。黒雲
一村立来ルケレ。殿乃ヨ、れほへ、か
あらゞ、おひし、給ひきり。ホ、あち
鶏ヲ、ヲんぎあつケレ。空て、変化乃去
成ベし。武士ヨ、伝て、夢固ヲ、ベ、そ
源平、家ハ、ヲと、撰ゞ、ら、れ、ケる、程ヨ

彩改をえらびたてまつれば、こゝにくせものの頼政を
射る兵庫の頭、こゝにまうきたるものの、
即おほいの猪早太、ひとりあがりして、
我れ引かへ二重九狩衣よ、鳥の尾をて
もいだりきるをかり矢、二筋まぎどう
せうよ、えうへてばかり厩代、床よ、きこう
して、沖の方の刻、限を入うやくと

伯居たり、若狭はあんだごとく、黒雲
一村立来り、沖殿はうへよりはほひ
頼政きりと、見あぐるまぼ雲中よあや
しきもの、姿あり、矢とつるうち
つゞひ、南無八幡大菩薩、心中よ
祈念してよつびきひやうと放矢よ
でゝうへてそうあるをえうりや

おうと矢ぢきびして、だつるところを
猪早太つゐとよりてつきたり。馬よ
まてのかぶきいてりきる。掛火をかも
しよくみきべかり。猪尾のうちあた
足手のとられごとくふるく鳥者、鶴よ
似たりきり。松うろなんだれうろ成
形ちの吹ぬり。実かれたる世盛り

甚一会をひるがへし深みかし成
浪へうかみべきたよりあきたの流
みぎりの水ろかはあらば社深き
うかみ縁あらあ。宮や他生の縁ぞ
とて。時もこそあまきよりひも
あるを世の人よあひ竹の掉とり
なほうつほ舟。乗とみえ。お

よるべなき浪よりなほ深きなみつたれ
絶えぬいくへよりやめの鶴のまとおうろ
やまきあ　やまこえたうろうやまき
まや　法の船　浮も沈もく
皆実相の道ひろき法とうきよと
よしなき法経　ごとく　ぎのまるく
一佛成道　見法界草木国土悪

皆成佛　非情皆共成仏
道　軽しべし　たのもべしや
五十二類も我同性　堅よひろ
まて真如月のよ　ほよ深ひつ
見法身　ありかた　難や　ぎやま
目前　引る者　とれば面　猿手
ばくらやの　増ら　変化の姿　荒れ

うろ〻なる様やあ
り道の変化とあつ
障とあらんとも切ち
東三條の林頭は猶
言詞のよろしく
ちゞきべ昂沸惱
をあやまりて

扨も我悪心
く仏法王法乃
ちうく遍滿して
く花行しう
殿乃うへよりび
去りまして王舎
ひしくたまひを

すも我ちゝわざとといりもを去てよ
ぱるひもよらぢ申て頼改笑ちきふ
あれば変化うきて落らしくと
地よたふれく名よ減て事思へ
ど新改前さきよりも悪天四討を
ありきるよとそ社なる去られた社
なる時上沸感あつて御ふまと云

法師を軽しめ下ちきくるをうぢ
大屋給りてまさざりをかりぬよ
打節郭公おとづれきれば大屋とり
あへず（シテ上合セズ）ほとゝぎすあひたるも雲井よ
あぐる部と信られ（中合ス）ばよりまさ沼の
ひぢをつゝたれ袖をひろぎ月を
もこゝ目よ魚ゝ見りり月のいれよ

まかきてつゝまり法師を引ぬ
前をまかりゝへきぞ頼改名をあ
ぐて我名をあげうつ保母よ
いきらて浪のよどみあれつ
ゆくもの鵜殿はあり屋
のゝらわゝうきたよ流きと成つく
打あぐらうつ保母月もゝ

ぐらきより暗きもちゐづ入よきる
ぎるかよ照をよ山端のつるうまてら
せ。乃端の月と芸よ。滅月もいを
よりり海月と世よいりあきり

大原御幸

是の後白河院は仕へなる臣下也
扨も洛度先帝二位殿をうづめ
奉り。平家は一門長門乃国いや
ものの沖ゐて悪果給ひて。女
院も海ゐを奉あぎち勢たまひい
をとゞ奉りひある時命なる

かりたのまれ給ふ。三河守範頼九郎
大夫判官義経兄弟借給ふ。
三種の外寶東国ゆゑ都へ納
まるべきなれども義経ゆゑ
つらき目をみるべうやとて先帝安徳
天皇乃御母堂建礼門院ならびに二位殿乃御
孫帝為ゑ大原乃寂光院へ隠
世をいとひ給ふ。法皇御幸をお
されば訪ひ有べきの勅諚ゆゑ作
間御幸乃山路もやゝ付たりやとて赤
作如甲斐ある。大原へ御幸なるべき
あれば行幸乃道ともも作り直清め
を仕へ上院へとの勅乃まひ、まいる
社あまた世のうきよりはなるゝ住

よりきれ深き松の扉の方の音
信まどほにて切へ露ませかきやうき
うちしげき竹のつら立居につきそて
物思へど人目あまころ安くりきれ
わくら心あきれど同物きそ　しづが
妻木の斧のおとゝ梢の嵐猿の
声これらの音ならでは正木のかつら

青つゞらくる人まれに成りて簟がん
えんが巻に志ぎまの思ひの行衛とて
雨ぐんくが扉ともうろほに独の
おとづれく
女院「いかに大納言の局
うしろの山にあがり樒をつみ候べし
局「童も御供申し妻木わらびをとり供御に
よろづあへ申すべし
女院サシ「たゞへわびびんおい

きりなれば、惠達法師、梵王の
都を出ぬ。檀特山のけはしき道
を志ざす。あつき氷を薪とり、
揆ぐよ難行し仏へ供をまつり
る。終よ成道あるべしとや。我も仏の
為あれば花筐とり、狂ふ
入江の重乃花の名残を

寿てや。玉藻を志ざす。山路うち
分ゆく露もふるさと大原乃
はゝ幸いうゞゆ。行幸をとゞめ
阿大原よ入洛。斯て大原よは幸
あつく寂光院の方様を見わたべ
露もまそ庭に夏草しぎりあひて
青柳糸をよゞ。つゆ深草浪

ゆられて錦をたちひろげたるぞ
岸にやまぶきの咲きぬべき雲乃
たゝ風より山時鳥はつ音も君の
法上池の汀
ぢ幸を待ぢほゝ
を叡覽有て池水よりみぎわの桜ちり
上言ハ和ヲ仕ヲ
まきて浪の花こそ仕ちらぬ咲れ
上言ハ和ヲ仕ヲ
ゆりよきる岩のひまより落くる

水乃音ちへよりかゝりて
緑
ぞ
ゆ
く
羅乃
垣もゆたかに乃山
絵
よ
わ
く
か
く
筆
ゆ
も
及
ひ
ぐ
て
宮
乃
法
堂
あ
り
鬼
や
ぶ
き
て
つ
ま
り
ふ
ゞ
れ
香
と
燒
上
と
ぼ
ゝ
れ
松
ち
く
月
も
又
孝
仁
の
灯
と
や
く
ぐ
と
や
く
る
所
伝
物
そ
ゞ
や
く
異
ワキ
成
社
歳
の
法
庵
室
ふ
く
な
ぎ
て
ん
行
よ
の
鳥

あさゞほちひかり。藤菊ぶくとぢ
きり。氣物もごとに氣きやおもしろ
庵室のうちへ案内申し
渡りぶぐ　具の方里に路の中納言
まうし　内侍　うれの扶人自まきなる山
中へ行て渡りぶぐ　はちんぐ
院に位居法師　法皇見送
法幸まうし　内侍　院の山へ花つゝま
法出まうし　留まうし　御幸
乃よりナしてゝ院の山へ花つゝ
法出まうし　法留まうしよりば。指洗
所よぢ屋をあまうれ法歸を法待あらう
ぢるまうし　法皇　やはらぬ妙やあの尼ぢ
法いろ行る者ぢ　内侍　ゝ法忍ゝきの

御理り見の信西ぐ娘あ乃内侍ぐ
あれる果ま天いかく　あさまき姿
あぐらあ乃もも志らぬ法ま天あれば恨
と乃ちらま思乃ぐ　法皇内　女院志いづ
ま志御渡りいぐ　内侍　乃山へ苑橘ま
法出ま天ん　法　御御　内侍　借ま志　犬納
言局ぷうず御を扣乃ま久へやぐて

御願ま志いべし　上皇後白河院　會釋　明日もま志ま
ま志ま久ま志ま久ま志ま久ま志ま久ま志ま久ま志ま久ま志
ら乃法ま志ぐら。唯先帝乃面影
ぷぐ陳ま志ま天あぐ。　中　極重殿人ま
他方便唯稱法陀ま極樂主尊を
始めぐり二位殿一門の人ぐ成等正
覺南無阿弥陀佛や。庵室ぐ　金　あ久ま

人音乃内のしは 局 出づらく見よ陽
休こはへ 内侍 只人う社ろ乃ろうゆづるひを
女院乃御 法 ちて行きぐ女
院だ約言の局せいづきぞ 上内侍 花びくこ
ひぢようきちけせ給ふ女院みるくわる
らきるる。妻木よりらびおうへたるゆ
だ約言の局あり。いろふ法皇乃御幸

みるくは 下女院 中こよあほ安執の間深
乃世を忘れも面らでうきんをとま
たそらをばもて源氏色。独乃きー
まもつま 下内侍 ゆ 下内侍 ゆ思へだ法乃
人同じ道ゆと頼むあり 上内侍 人念窓
乃前へ 下セウトルニュ 杉 見に明を知つ
十人乃栄の扉よ出。下ウトルジュ 主の来通を

彷りるは思ひやりきるは人の言の葉にし
へと帰るを知らでの源氏やさ君
あへは数々のめぐみまかせてあまれ
もほらず大原やまれの里の細道
てほろの清水月あらでは影や今
はこれるらん　扨やは幸これもの
如何時節なる覧　当過ぎ夏も

ちやきみまつりに折あまきは青葉まじり
まじれる夏木立去る名残ぞしきまま
遠し山にかゝる白雲の　散りし
花のかたみや　夏草のしげみが原
分けることもなく分け入る道の末　寂
とぞや寂光の松のあれ光の
影を借りたるに　光やうのかぎりも明ら

けさ　松がえ　ふや　池の藤
浪　つかきて　見　水　幸を
（女）
流ばほ　書　塚　れの　枝　撮り　花
よ　もめ　ら　か　中　あ　る　方　様を
（上）
袖と　撫　ま　く　も　か　で　き　れ
光　浄　幸　宋　と　ぼ　う　の　き　ば　も
有　き　復　居　所　べ　や　ぐ　く　思　び　を
（中）
深　乃　ば　く　の　ま　る　て　雲　井　月
を　よ　う　よ　れ　ん　と　か　様　な　思　出　し　よ
光　ぬ　ぎ　と　乃　う　か　ま　ひ　ぐ　も　ま　り
ぐ　う　社　へ　法　迎　当　ま　る　人　申　き　の
（女院）
院　の　六　道　に　者　換　ま　て　ば　境　ば　き　る
と　う　や　仏　学　薬　乃　伝　あ　ら　で　き　乃　ば　ふ
事　あ　き　よ　ん　ま　こ　う　の　へ　勅　読　の

ちるちへ（オン）あれども。倩（ツラク）我（ワレ）を案（アン）ず
みるよ（クリ上ニヲル）文字（モジ）を縋（ツガ）ぜれば岸（キシ）の顔（カホ）よ
根（ウ）と離（ハナ）さぬ草（クサ）の命（イノチ）を倫（ヌス）ぜれば江（エ）
ばとりよつあぐばる舟（フネ）（ヨコ上ニ見ルサレ）　引（ヒ）れば天（テン）ど
乃（ノ）たの三も字（ジ）よ吉（キチ）ら露（ツユ）成（ナ）ぬ成（ナ）ら
あぐらへ異（ケ）ぬ年（トシ）月（ツキ）も。絶（タエ）よ立（タチ）寝（ネ）の
とろへの清（キヨ）もやられぬいのちれ中（ウチ）よ

六道乃（ノ）ちまるのよ迷（メイ）ひ（ヒ）ありウヤ（ウヤ）まぐ（クセ中）
一門（イチモン）西海（サイカイ）乃（ノ）浪（ナミ）よりうきまづ（中イ）ぶるべも紅（クレナイ）
まぬ母（ハハ）乃（ノ）うち海（ウミ）よ乃（ノ）づ（イ）めども（中ト）
吉（キチ）ほ（ヲ）あきべ（飽）ぬ（ネ）ぬ（ネ）ぐ（中ヒ）きだ（イ）うの
ごとくなりつ（ヤ）ある時（ヨ）汀（ミギハ）の浪（ナミ）荒（ア）
ぬ（ヌ）よ（ヨ）うちつ（ヤ）たかの心（ヒ）ちてふ（ヲ）こ
ぞりつ（ヤ）泣（ナキ）ちきづ（イ）邑（ヤ）きうんわ（ワ）乃（ノ）

罪人も多くや侍らん、まゝ上西院
ある時、遠ぎ所へ流されぬ。前の陸奥の国
乃たゝひ、急ぎ打ち立ちて、やがて駒の
蹄の音きけば、高き道、名残も尤
やもたゝず、人通り多き道なり
もつるうきをば、法河
流よ方、雖ども、光帝乃沖

はしらに今のかうよとみくしゃ紙なる
教經のきの太郎兄弟をたゞ乃脇よ
はちに家好乃借をよとて海中ゑ花でへ
新中納言知盛の沖ある舟乃いりを
引上甲とやらんよいてきのとごの
家長ゑ弓とゆうことをゑりかつ其まく
海ゑ入りよりゑ時二位殿ゑ色々
二門ぎぬよ縫りが袴のうだたくを
はんで我ゑ安へありとても敵の
手よわるまじ三の浦ともけ
はんと安徳天皇ゑ手をとり舟ゑ
よ陰ゑいづくへかくゑと勅浪なりよ
此國とヤスよ逆ゑ戻れほくかく涙ま
き所也極楽浄土とナレてめでた

紀可の洗波乃下まちぶら姫あれば
海幸あり山幸あり山ん海そうそう行へ
ば。極楽世界たりとて東へ向ひ給
て。天照大神よりいと庵やちき行ひて
又十余乃海ためよりむう母
ゾーラ上安院
おわりまし人うぞ去る爰もすう
ば乃流れよ浪底ふもらやこあり

やをつこ子をを家朝の海制ふく
千寿ひうこよ入行ふうづらもつ
静八
して去ぐうを。海乃ぶとり上
てうひあま命あらへ姫たくひ龍
額よあひ甘りふくのあるぐよ
独を去屋るぐいづやまひまで
も切ぬ孫去いうぐつきぬべまやや

をわんかうとすゝめきこゆ。れば

とゝやめ遠ざけ寵光院を出給へば

女院の御業成戸より出給ひ給ひ

まゐりて御庵室より給ふ

梅枝

紅梅の枝に

捨てがたくめづらしき御筆の心ばえ

なりまさり見へ給ふ甲斐の国身近き

より出でる世にまれなる我縁の宿世を

深度きんと多年は程よ洗

反田豊迫國は新仏

もつぎ雲水乃ハ

接の宮月日程あく接をきて「所を
とへば世をいとふ我家にも住乃里
もいやく高はきりく急の程は
見へ八早津の国住吉より高くいと荒嶮
山や能よ村あれつりいと成庵よ宿を
かりゞやと思ふ此屋のうち人案
内なれ女や接待乃宿よ通ふ

やゝいへば所のうゝ人まれく
もあるまゝ島よ乃同人の頼や旅見
八無縁の仏門さへ一夜宿を借人
女宮ゝ出家は事宿の利益成べきれ
ばぎあゞら傾く行乃世ぞ埴生の小屋
いゞきて行と沙分を置べき上ヲキカル由
うちのいゞ務く世降くる雨よ立ける

京にはいりとして、儀式へ、宮や
女院日も長竹に、ものさびの給へ
とて、ものやとあるに、露の草
の宿りさきたくさに、油をかきてきたく
れまりあれば、西北よりおも
こりて、東南より来る雨あるやう
なれば、晴て月のなかるやうに
位置の松風に、心をして、接への夢を
ぢまりたあるに、なほ主はやすべき
ものなれば、何事にそはむ、見るかは
ぎりなる太鼓、同じく数舞の長震の不
審は、女よくは不審はれ、
人の見るやうに、長成物語
はかりをやすべし、さらば

物語へ　女　昔當國天王寺ノ侍同じ
いひ侍人あり同じく此佳き女を富士
と申す侍人有りがそれ内裏ノ管絃の
やくを勤ひ[illegible]ひよ都よりくて富士
此役を給ふるよりて侍同安らびよ男
冨士をあやまつ討まぬ其後ふじが
妻とのふをあ[illegible]ぞ帝を大敵と

うつく慰ひ[illegible]ぞ終よ空しく成
ぬ此縁なぐら吊ひて給へ加様
ノ妻ノ家りは其古への富士ぞ妻ぞゆう
里の人まて[illegible]家をか　女　いやとよろれ
ぬるかの女おもよを者ぞ世語ぞ
かりしぞ有べうらび　上ロキカル　ちらび行とて
此物語深き思ひ[illegible]出く涙とあ

給ふべきや。女房行きても女の思ひ深く
ぶよ。墓に涙を流すもあるべし。あるべき義と思はん
ぎぎらん。牛を不審に強く。殺生の
太鼓笛のうへぬ。愛よ強く。給ふらん
主は昔より成仏せず。太鼓の板を焼き
鳥あるべきうへぬ。此所代よ。仏もうれ
あるべき。水のうへ。忘るべ年をへ。物と

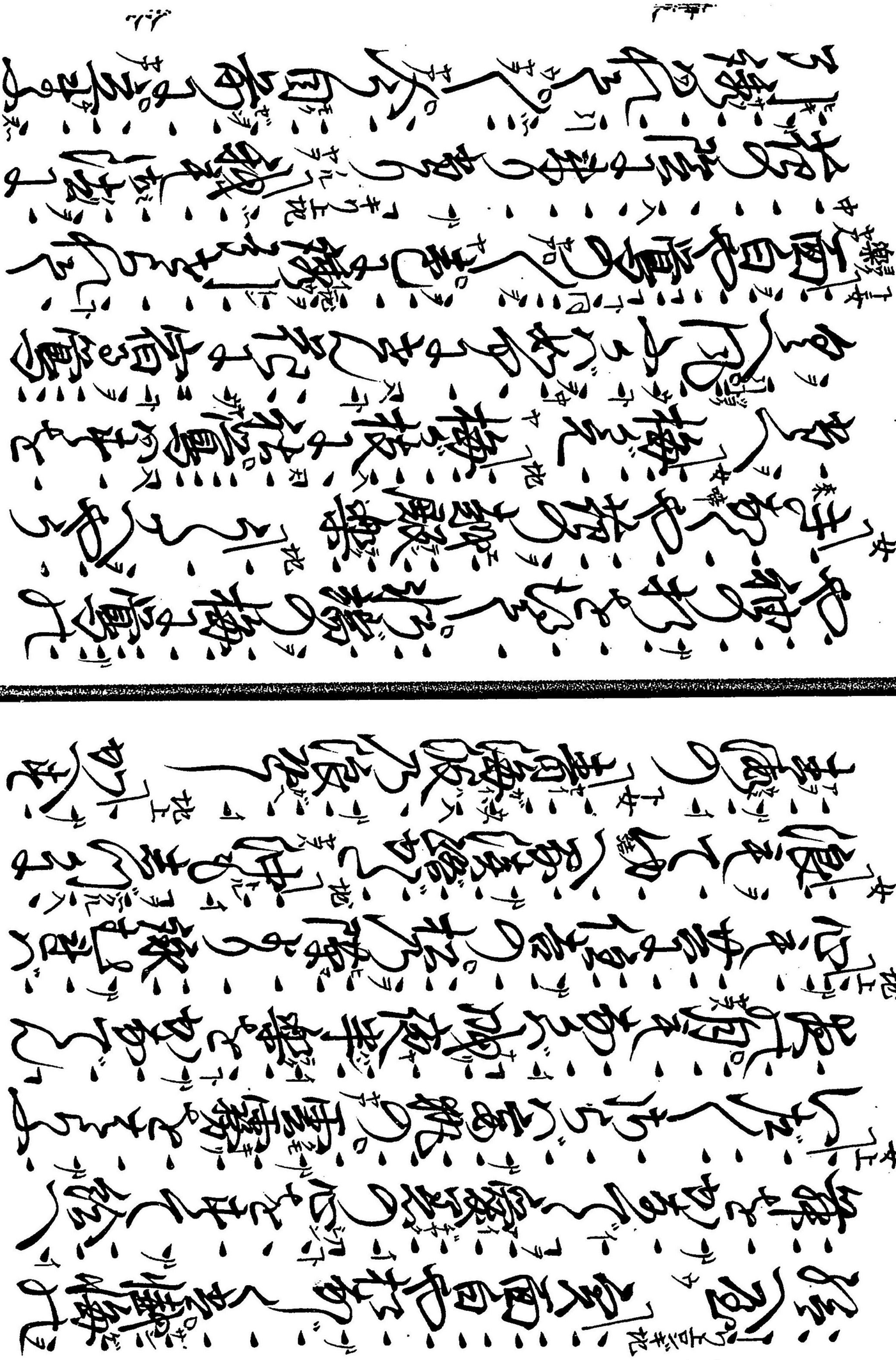
まるる。執心をだに給へといひ
捨て。書きをくべきよ。失よ。きり丈
仏法。極楽なりとやを。法華。是家
第一。三世の諸仏。出の本懐。
成仏。直道なり。あらんづく女人成仏
疑あるべきらん。者不得作。梵天王。去
帝釈。三者魔王。四者梵王。五者仏身

行安分 即心成仏行絶ひとあり海
ハ。ふつき執心をぱらってうつひ給へや
上書 或の若有罔法去〳〵無一不成仏と説
一度此經を聞人成仏きびとしてうすあ
ぱ。ぐ形めたりそ。やはり燈の陰よりも
きーしる人の来りて夢うつ魂名と
ぱとうれき姿が ぎやかみきべ女
性姿あるぐ華の衣裳を見てばか
かりとつとり姿あり 扇のかつる富ぐ妻
ハ。其出雲中くまひたう 女 宮や踏
ぎーき芦きりふろよぐ中とつ
今分のとうきらぬぐやきれ 雑 裏 脱 約
ぐら所ある法の受物よあつぐ家所男
ぱ。姿とやなぐやぱ浴ぐ強つぬぐ知ら

陰陽ひのかみく
昔をちんぎよ語りやさんぽ
我あらぬ
あらく悪敵よ隠
女心の乱髪ゆひうひ
妻の櫛を載き洗特家と
ふかれ洗太敷の

敷物の枕ゆ
たくゆ可よ
男出る一人の
つぐるの見
思ひ
松てよ花あ
契りあさぎぬ

上女



舞の袖こそかへすとも思ひ想夫恋
恋しや昔の鼓うつ夜の秋が夜やな
思へば悲しかるべき物の秋も執心
ぞと見れば月もいり音楽の松と
の松風によそへこそ有し姿もあき書
に面影ぞのこりや残るらん

誓願寺

教への道も一聲の法を四
方にひろめん　是は念仏の行者
一遍と申す聖にて候我熊野に
参り七日参籠申し証誠殿に通
夜申して候へばあらたなる霊夢を蒙
りて六十萬人決定往生の札

とぞ。あ女孫く國ぞよひろめよとの宣
受よ仕をぞまづ都へと心ばりて
三人の孫陀頼母。弟ひえ三の御方とうにそ
立つる接家紀の國寺ぐたつる月
仕へ自救かさありて時も狂あれ事
ヒゼの都よ高よきりく急程
よ見つや都拾弟寺よ高て告よ

但をてれと廣めぐやと男が。力雖
や宮伝法乃力とて貴賤群集の
色ぞよ神とうら夜蓮とつぐ知もち
ぬもあ者へて今三時道場よ出
入人のありがちよ會釋有のよ拾
陽の花乃宮のとて更よ心の今よ墨
法乃夕の鐘乃声ぐよ。拾名ち法

女 鬼鏡乃鳴音 神楽乃人音 行の松
風 れのまくと 女 かすれば 涙陀
頼母 心を誰も出て 老のくうちよ
はるく蓮城の 濁りよ志まぬ心を
仁疑ひ乃あるべき方 難や洗をへ
そらきぬ 撥ひまろ乃たりうを拾ぶ
やと人の 沙抱をばやたも者ん

女 いろと人よ べき事乃ハ 仁ゴト
ゆてゆゑ 女 洗ぢれを見なれば 卒萬
人沒宮 住まあり 掛こ千万人よ
里和の 住まよ 漏くべ 手や 洗ぢ
不審よ 社人 女 よくこ 不審ハ 和ハ
ぬ乃三熊野 住 夢想よ 匂乃 文方
ぞ宮乃 文の こ乃 字をとりて 神文

仏ためよ出付り唱波空へ法華南無
阿弥陀仏と洗文ばうり法華経へ女房
四方乃文をやらん声妙や唱るまく
ガル水流ぐち乃水を掬ら声あり法へ
呼内
いでく語てゆのをヤさん六字名号
一遍法十界倍百一遍弥萬行融
会一遍独人中ゲニウ上ゲ好好華洗四句

の文字乃字あれば六十萬人乃
書るなり 女房内 人う社不審を氏
の闇も照ら弥陀の教へ光明
遍照十方世界よもつ衆生あきば
法隆寺づらよ六十万人人数を
いで宮むべき 女房内 掬ら姫や四豊
洗ぬ乃六十萬人其人数とべ

拾て、改宝僧堂南無阿弥陀仏と
唱へ、女おとこ一筋よ会ぶ事あらば、うれてそ即
改宝の僧堂あきやに仏ゑもぞれわ
出て、南無あるぶと唱へれば
仏も神もあらきやうに、母あるぶ
いの声ばかり至誠心深心回向願の
鐘は声耳まろみ方雑や。加よ妙

あるぶ教十様一声收わるで。惜りを
も進ひとも。給ぶ方雑き
声程よ陽雲ようろひ。西よ
ゆぎろふ月光の会を急ぶん
炭会ぶをいぢやぶ急ぶ母。もや更
ゆくや炭会仏の藤元の眼り見
ちんぶ鐘おあらぶ会仏て。那雑や

五障の雲はれ、五戒をたもつべ
し。世より二世安楽の国よりやまれ
ぬべし。いざ安楽国あまや
ぐ。まゐる蓮台の縁ぞ。如成
有難やとぞ。あり。めて法師の
国淳き道ぞ。東そ。頼ぞ
如来教へ。或は利益無量罪

法の世も。法師と。吟物を
方雑やく。萬諸仏教信心あらば
仏ぬべし。法本尊も。同ど
法師を。佛と人を。弟子
仏ミヤスあり。如来人ぬべき

力れい。仁事。誓願
寺と打る。願さのを。人乃法師。跡ふ

ろく字は名号まあて給りく人

ワキ　見のつぎ寺事を家に拾うれまうより

誓願寺とうち唱る願とのを六字乃

名号まあんべ事の男もよらぬ事をば

女　いや見も法本尊の由告と白せ

ワキ　うも法本尊の由告と沙弥乃何

くま住人ぞ　女　童ぞ栖の塔をば

ワキ　つぎやあれ石塔の和泉式部乃

墓と社つまはすこの不審也

女　ちのみ不審ぞ猛ろよ我も昔

法寺に値遇あまきぶも歩事も

秋やかなぶ　はぶぶ　ぶらぐ

名をあぐちんも和うやそれとて

もと人よ　ぶ偽りのあき跡よ和泉式

部の我ごとて石塔代しの次代光
と共よ歩くはきりく中へ佛道より住
持彩寺と打たる額とのきにかろ
名号を書付て仏あるようし世れば
上歌
ゆ
ぎも異香薫じづく花ゆり
くぐり音楽に紛メもそるり代あらた
ちよ賞よつきても称名の心をくつを

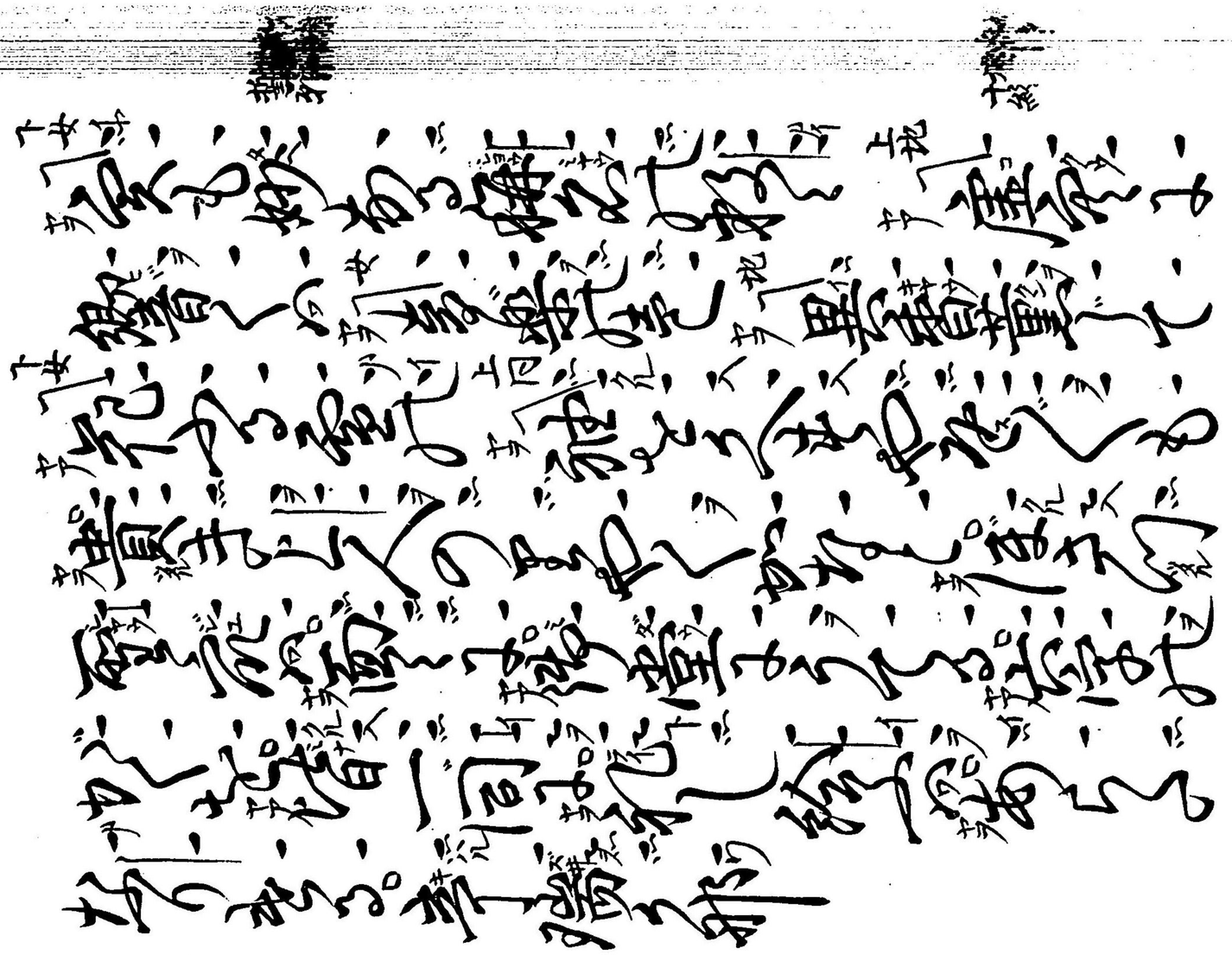
頼つ鐘うちあらて同音よ南無
あみだ仏陀如来嵐方雅代額の
名号や御来世乃意法度の為代
法名を顕りて佛前ようも有ば
ちよ我も切りある夢代世よ和泉式部
といとかれ乃仏事をうるや極楽乃
歌舞の菩薩と成るあり二十五の

地上
金蓮寺流れ法よの紫雲たなびく
夕日歌　常乃とそ山ぎきよく
地上
ちかづら家で極楽世界よ生れきる
甲
かと方難ちよ　市上　作當寺極楽寺と
ヤ世まれの天智百宝法師本堂
二
意悲萬行の大金蓮寺普の服祈
甲
御作とうや　女上　祈といひ佛といひ

波の蘭あり　知るよ和光の
歌ひろく　躰多あらられて宗生
海度ち本堂　ちきび毎日一
度の西方浄ぢよ通ひ給て来迎
引接ひ極ひ　ちあらつて　ちまし
金高遠よ　弧雲ち　あれの重龍
来迎ち落日ち前とうや　首在宮山の

法名の法華一乗を西方の弥陀如来、
慈眼視衆生あらわれて、きやうぎん
観世音三世利益同一体なる雖や我ら
かために悲願あり　上安　若我成佛乃
至十方無量諸佛
ぜうりとうくるよのくるしみ
ぐそくの法は母のうみあき捨ちて
も渡る彼岸はいりくて楽と極る

四十八願あれや十悪邪乃まよひの
雲も晴て月の西方も家
と去り去をからしの心浄だしの況
捨頼ちと抜むなり　上安　ヨイ合　ヨ　菩薩
さ度くの　地上　佛合　ヨ　ものを
序舞　獨ある佛法名と寿こん　古上ハ付　おのく
歸る法は場人乃　上地　ヨ　法の場人乃



255
532

明治四拾五年六月十五日印刷
同　年六月二十日發行

復製不許

再訂正者　觀世清次郎

發行兼印刷者　京都市上京區二條通麩屋町角　檜常之助

印刷所　東京市四谷區傳馬町貳丁目　江川堂